

第26回 松本清張研究奨励事業 研究報告書

研究題目：松本清張と能楽

報告者：国土館大学文学部日本文学・文化コース  
倉持長子

## 1 本研究の概要と問題意識・研究の目的

本研究の題目「松本清張と能楽」は、主に清張の短編小説「山師」、「世阿弥」、「足袋」を中心に、清張が能楽（猿（申）楽／能・狂言）をどのように受容し、自らの小説に題材として、また表現の方法として取り入れていったのかを調査・考察することを目指して設定したものである。

報告者は能楽研究を専門としている。中世の能の諸作品について考察するとともに、近代における能の受容と批判のありよう、さらには能を題材・表現の方法とする新しい近代文学作品の展開について研究をおこなってきた。たとえば、近代の重大な社会・環境問題である水俣病およびその患者たちの絶望と救済を描いた石牟礼道子による能「不知火」について研究発表（2021年5月25日・於EAA 東京大学東アジア藝文書院）をおこない、その成果を論考「能「不知火」に見る救い—能の枠組みを超えて」（『EAA Forum20 石牟礼道子を読む 2—世界と文学を問う』2022年3月）にまとめている。報告者は、近代の小説の中でも、とりわけ近現代社会における弱者と巨大権力の関係、また弱者の救いを目指して能が果たせる役割について明らかにしたいと考えている。そうした関心において、松本清張はきわめて重要な作家の一人と位置付けることができる。

清張による歴史探究、とりわけ古代史へと傾けられた凄まじい情熱はよく知られており、その歴史小説を研究対象として、当該松本清張研究奨励事業をはじめとする多くの成果が上げられてきた。その一方で、清張の歴史小説や近代小説に描かれた能楽（猿楽）および伝統芸能については、十分な研究がなされてきたとは言い難い状況にある。日本の中近世を通じて受け継がれてきた芸能である能楽（猿楽）、猿楽役者たちと権力者の関係、また昭和期の能楽界を扱った上記の三作品については、森本穂『松本清張 歴史小説のたのしみ』（洋々社、2008年）を除き、小野寺凡「世阿弥」（『国文学解釈と鑑賞』1977年2月号）、増田正造「近代文学と能 2」（『観世』1986年7月号）等の卓論ながらも短い評が見えるのみである。

しかし、清張がめざした歴史探究や、芸術に人生を捧げた人間たちの内実に対する追究、そしてそれらの小説への取り込みについて十全に理解するためには、清張が活写した芸能者たちとその周辺から透かし見える清張の中世・近世能楽界についての知見、清張が切り込んだ昭和期における能楽界の研究事情や稽古システムの実態などをより詳しく調査・考察してゆく必要があると考えた。同時に、清張による能楽への批評的眼差しと理解は、どのような手法をもって小説の表現として結実したのかという問題まで解決されなければならないだろう。たとえば、能楽伝書への入念な取材をふまえ、芸術的人間としての世阿弥の生涯を辿った小説「世阿弥」にみる清張の能楽（猿楽）理解については、能楽研究者の側からみると「すこしく乱暴にすぎる」（上掲増田）と批判を受けているほか、世阿弥伝書の一つ『別紙口伝』の成立についての叙述をめぐっても「能の側から言ってとても困る。ただ小説のフィクションとしては許容範囲にあるものかどうか、私にはわからない」（同増田）といわれるように、一見、不審点も多く、また歴史小説として認められるかどうか曖昧とされている。

そこで報告者は、清張による能楽や世阿弥についての叙述の典拠について突き止めるとともに、問題とされる複数の箇所についても、単に清張の誤解や認識不足として断じてしまってよいのか、あるいはこうした問題は清張がめざす小説の手法に起因するものなのか、といった疑問を明らかにしていきたいと考えた。ついては、本研究「松本清張と能楽」を通じて、松本清張の能楽についての知見、問題意識、小説にみる固有の表現の一端が紐解かれ、微力ながら松本清張研究の発展に貢献できるものと確信し、研究を遂行することにした。

## 2 研究計画の実施

上記の研究目的を達成すべく実施した研究は以下のとおりである。

### 【2024年】

- ・4月1日 「山師」「世阿弥」「足袋」を熟読して考察をすすめるとともに、他の清張の作品や研究書・研究論文を入手し、先行研究の調査を開始した。
- ・7月8日 松本清張記念館より、第26回松本清張研究奨励事業入選決定通知書を受領し、購入図書・実地見学先について検討を開始した。松本清張「世阿弥」および主な歴史小説の分析、松本清張の蔵書調査等を開始した。
- ・12月7日 第48回松本清張研究会（於東京学芸大学）に出席した。小山俊樹氏（帝京大学教授）による講演「再考・陸軍機密費事件 —松本清張『昭和史発掘』の政治史的継承」および孫平氏（長崎外国語大学特任講師）による研究発表「松本清張文学研究 —「法」の問題を中心に」を聴講した。これにより、清張が執筆に際してどのように歴史的な題材と対峙したか、その態度を学んだ。  
また、中川里志氏（松本清張記念館研究員）より清張の蔵書について、また藤井康栄氏（記念館名誉館長）より清張の芝居経験や家族の謡愛好についてご教示いただいた。

### 【2025年】

- ・1月7日 上野誠氏（國學院大學特別教授、第23回松本清張研究奨励事業入選企画における共同研究「『万葉考古学』における都市と地方をつなぐ交通の研究」研究代表者）による講演会「松本清張と古代」を開催した。報告者はコメンテーターとして登壇した。講演内容は、清張がいかに昭和期の古代・考古学人気の高まりという需要に応じて作品発表や活動をおこなうことができていたか、ということについての考察であった。
- ・4月11日～13日  
北九州市立松本清張記念館、および北九州市立文学館において実地見学・調査をおこなった。  
12日 9:00～17:00（開館一閉館）まで、松本清張記念館を訪問した。館長古賀厚志氏より、現在の教育現場や芸能の現場における清張作品の享受についてお話を伺うことができた。また、中川里志氏の案内で展示資料の解

説を受けたほか、清張と能楽のかかわりを示す閉架の画像資料・戦前の貴重資料等も閲覧させていただくことができた。特に蔵書の情報についてご教示いただき、清張晩年の能舞台を背景とする家族写真を拝見できたことは、本研究の遂行に大いに資するところとなった。調査を重ねたところ、この能舞台の写真は清張が晩年に佐渡でおこなった講演時に、佐渡市堀記念金井能楽堂にて撮影されたものであることが判明した。

13日 10:00～12:00 まで、北九州市立文学館において、松本清張の文学を育んだ北九州市の文化・文学的土壌について多くの資料の閲覧をおこなうことができた。

※4月15日～16日にかけて、松本清張記念館において購入した書籍4点の費用、東京一小倉間の交通費、小倉における2泊の宿泊費用、北九州市立文学館の入館料等についての財務処理をおこなった。

- ・6月7日 第49回松本清張研究発表会（於：東京学芸大学）に出席し、「松本清張と能楽 一芸能者へのまなざしをめぐって」と題した研究発表をおこなった。

- ・6月28日～29日

晩年に清張が講演をおこなった新潟県佐渡市における調査をおこなった。6月28日は、佐渡市立中央図書館協力のもと、清張が1992年3月21日から22日にかけて佐渡に来訪し、講演をおこなった際のチラシ、写真、講演録等を調査させていただいた。本講演録と写真は当該図書館にしか所蔵が確認されず、出版等もされていないため、大変貴重な資料である。

29日は、佐渡博物館、佐渡歴史伝説館にて佐渡の自然・歴史について見学をおこなった。また、世阿弥が滞在したことで知られ、かつ清張揮毫の句碑が立つ正法寺と世阿弥の伝書「金島書」に書かれた長谷寺を見学した。さらに、清張が晩年に訪れ、家族と記念撮影および講演をおこなった会場でもある堀記念金井能楽堂を見学することができた。

※7月2日、勤務先への出張報告をおこない、財務処理をおこなった。

- ・9月25日～10月3日

9月25日書籍の最終購入について起票、10月3日支払いをもって本研究の清算を完了した。

### 3 研究成果

本研究事業では、主に以下の成果を上げることができた。

#### ①「世阿弥」の考察

当該項目が最も成果を挙げられた点である。清張の歴史短編小説「世阿弥」を主な対象として、清張が能楽（猿（申）楽／能・狂言）をどのように受容し、自らの小説に題材として、また表現の方法として取り入れていったのかを調査・考察したか、ある程度、明らかにすることができたと考える。

「世阿弥」は、『芸術新潮』昭和 32 年（1957 年）2 月号に「日本芸譚(二)世阿弥 松本清張」として所載された。『小説日本芸譚』「後記」には、「芸術家は存在しても、人間の所在が分らない」「芸術家の人間としての姿が見えてこない」「当人が芸術に被光されて、見えなくなっている」「芸術が人間の上にハレーションを起こしている」と執筆に際しての困惑が率直に綴られている。本当に知りたいのは芸術家ではなく、「人間」なのだとも書かれており、そうした困難な局面をいかに乗り越えるかが、本連載に臨む清張にとっての課題でもあったと推察される。

本作品の先行研究としては、上記 1 にも記した通り、小野寺凡「松本清張 世阿弥」や森本穂の『松本清張 歴史小説のたのしみ』の「世阿弥」評があるが、特に能楽研究者からの評としては、増田正造「近代文学と能 2」が注目される。本評では、仙洞御所への出入り禁止に対する世阿弥の描写「抵抗出来ぬ破滅は、時に壮快なもの」について、「清張らしい渴いた見事さ」であると一定の評価がなされた。その一方で、本作品における能の理解に対しては痛烈に批判している。「世阿弥」における「神楽の余興から成長した猿楽」とか、「田舎猿楽であるから、略して田楽といった」という記述は「少しく乱暴にすぎる」という。

清張が「世阿弥」執筆に際して依拠したと見られる世阿弥の伝書『風姿花伝』は、七つのパートに分かれている。その最後に置かれるのが「第七別紙口伝」である。清張はこの七パートが段階的に成立したと捉え、その「別紙口伝」について世阿弥が五十六歳の時に、老境に入って最後に書いたと理解しているが、これは増田の批判するとおり、誤りである。「世阿弥」では、「年寄りの羨望と嫉みという一般の演技論のこの主題が、思いがけない毒液の飛沫を彼に浴びせた仕儀になった」との叙述があり、「芸の花」を求めて若い年代と格闘する世阿弥の老境を描き出そうという試みがなされており、その証拠として「別紙口伝」が引用される。しかし、史実では、世阿弥が「別紙口伝」を書いたのは応永 10 年（1403）年の 40 歳頃であるから、「別紙口伝」から老境の世阿弥の心中を引き出そうとした清張の意図は、確かに無理がある。

しかし、こうした清張の世阿弥、また世阿弥伝書の理解は致し方ない面があると報告者は考える。というのは、世阿弥の能楽論研究が本格的となるのは、清張が「世阿弥」を執筆した後、昭和 36（1961）年に『歌論集・能楽論集』と『日本古典文学大系』が出て以降のことになるからである。特に、花伝の伝本研究が一定の完成を見、誰もが読めるようになるのは、昭和 49（1974）年『世阿弥 禅竹』が出版されてから、といってもよいであろう。要は、清張は『風姿花伝』や『申楽談儀』といった能楽伝書を深く読み込んだものの、その成立史の研究までは触れることは難しかった、と考えられよう。

清張は、その蔵書のようにすから、能勢朝次『世阿弥十六部集評釈』（昭和 15 年）や川瀬一馬『世阿弥自筆伝書集』（昭和 18 年）などを用いて世阿弥の伝書に触れ、「世阿弥」を書いたと考えられるが、1950 年代半ばには、まだ『風姿花伝』の成立は明らかにされていなかったのである。その意味では、「第七別紙口伝」を世阿弥老境の筆と捉えた清張の理解は、至極当然と思われる。

なお、「世阿弥」の中で注目したいのは、世阿弥の伝書だけでなく、世阿弥の娘婿である金春禅竹による伝書『歌舞髓脳記』が引用される点である。原著では、時の将軍足利義満が一流の鑑賞眼を持っていたことを示す上で、「花をかざし玉をみがく風流に至りては、鹿苑院殿（義満）の御代より殊に盛りにして、和州江州の芸人、あまねく御覧じ別ち、強俗を斥け、幽玄をば請じ、諸家の名匠善悪の御批判、分明仰せ出されしより、道の筋目品々位位を弁え、芸道に於ては更に私なきものなり」（『歌舞髓脳記』）が引用される。

実は、禅竹の伝書研究が一般に読めるようになるのは、野々村戒三『金春十七部集』（昭和7年）を嚆矢とする。さらに、昭和44年（1969）に出版された表章・伊藤正義校注の『金春古伝書集成』によって、初めて校定された形で禅竹の『歌舞髓脳記』が読めるようになった。つまり、いまだ禅竹伝書に触れることが難しい昭和30年代に、清張は『歌舞髓脳記』を自らの目で、跋文まで読み込んで「世阿弥」に引用しているということになる。

また、批判されてきた清張の能楽への誤解についても、むしろ清張が最新の研究をふまえた所以であると見做してよいのではないだろうか。増田も批判した「神楽の余興から成長した猿楽」という理解は、当時の日本文化研究の第一人者である桑田忠親『世阿弥と利休——能楽と茶道——』（昭和31年）からのものと考えられる。桑田の論考の中では、朝廷の神嘗祭や伊勢神宮の大祭の神楽の後で、余興として猿楽は始まった記述されている。『小説日本芸譚』「後記」で、清張は「なるべく誤りのない見方をするように努めた。（中略）読書の外には、出来るだけ専門学者を訪ねて意見をきいた」とあり、その中に、桑田忠親、久野健、谷信一といった東西きっての学者の名前が並んでいる。「田楽は田舎田楽であるから田楽」という誤解も、実は桑田忠親の論を引くものである。

さらに、野上豊一郎『世阿弥元清』（昭和13年）の中では、「世阿弥は観阿弥に較べて遙かに恵まれた境遇から出発した」「その地位を利用して芸道に精進することができた」と書かれており、これは「世阿弥」の「世阿弥は初めから仕合せな身分のなかで成長した。彼は少年時代から義満の傍にあった」「彼らの喝采をきき、匂うような貴族の空気を吸って舞って来た」という表現に影響を与えている可能性がある。

「世阿弥」においては、己自身の消失を恐れ、元雅への相伝を惜しむ、「拒否の自我」を持つ世阿弥像が描かれる。「彼自身が主役で、彼の作劇は他人のためでなく、その中で絶えず己が動いていなければならない」という叙述があるが、これも上掲野上の「世阿弥は自分のために、もしくは自分の時代のために能を作ったのであった」「いつの時代ともわからぬ子孫後世のために作ったのでもなかった」という、「自分のため」「自分の時代のため」という表現を清張なりに描き直したものと言えるのではないだろうか。

清張の「世阿弥」以前には、瀧川駿「世阿弥」（昭和30年）、また清張以後も岸田國士賞を受賞し、国内外から好評を博した山崎正和の戯曲「世阿弥」（昭和38年）など、世阿弥を主題とした作品は世に出されている。そうした中で、清張の「世阿弥」

の固有性はどこに求められるのか。清張の「世阿弥」には、世阿弥というひとりの人間の胸中およびそれを取り巻く芸能的環境を解明すべく、『風姿花伝』や『申楽談儀』、『歌舞髓脳記』といった、当時の猿楽役者世阿弥・金春禅竹の生の言葉から肉薄しようとする態度が非常に強く見られる。また、昭和30年代の執筆時点における一流学者たちの最新研究を取り込み、フィクショナルな部分は極めて最小限にとどめようとする意識も窺える。清張の「世阿弥」は、史実や記録的資料から、推理できる最大の範囲内で、社会権力に翻弄されつつ抵抗する人間の姿と、心境・業・芸の琢磨と子孫への伝承という問題に面した人間の内的真実を見極めようとしていると位置付けることができる。

## ②清張と芸能（伝統芸能）の関わり ―能楽を中心に―

清張は幼少期から講談・芝居に親しんでいた。『半生の記』の「白い絵本」では、父から聞いた講談や、下関の安価な芝居小屋での体験が語られている。これらの芸能経験は、後年の歴史叙述における臨場感や、芸能者に向けられた独特のまなざしに影響を与えたと考えられる。こうした清張の幼少期の芸能体験については、中川里志「清張と下関」（『松本清張研究』21、2020年）から学ぶところが大きかった。

また、清張の家族（清張夫人ナヲさんか義理の娘さん）が謡曲を習っていたことから、能楽は清張にとって身近な芸能であったといえる。

清張記念館が公開している「蔵書データベース」によると、清張の書斎には、能楽・謡曲・歌舞伎・浄瑠璃に関する多くの蔵書が確認される。能楽関係では、和田萬吉『謡曲物語』、野上豊一郎『世阿弥と其の藝術思想』、川瀬一馬校訂『世阿弥自筆傳書集』、日本古典文学大系『謡曲集』『狂言集』『能楽論集』などが見られた。

特に重視されるのは、中川氏が紹介してくださった松本亀松『能』（アルス文化叢書30、昭和18年）で、本書には清張の捺印が見られることから、戦前に購入し、晩年まで所蔵していたことが判明した。本書は全120頁のうち、前半（64頁）が写真ページとなっており、当時の名人肖像、能舞台の様子、五番立能の代表的演目の名場面などが収められており、能を観たことのない者でも能についてかなりの知見を得ることのできる書となっている。後半「総説」では、観阿弥・世阿弥が文中3年（応安7年）の今熊野をきっかけに将軍義満から寵愛されたことや、観阿弥が「同朋衆」に加えられたことなど、「世阿弥」執筆の資料となるような情報も見られる。

なお、清張は多くの作品で芸能を重要なモチーフとして扱っている点も注目したい。以下、諸作品を挙げつつ、能（猿楽）との関わりについて言及しておく。

「柳生一族」（昭和30年）では、能好きで有名な柳生宗矩をめぐる描写として、「柳生宗頼は利勝に凭った。利勝は猿楽を好む。宗頼もはなはだ好んだ。はじめはそういう因縁からであった」「宗矩は土井のほか、酒井忠世や堀田正盛の屋敷に出入りし、猿楽を観たり、物事を斡旋したりして、しだいに政治的手腕を伸ばしていった」との叙述があり、大名や武士の間で猿楽がコミュニケーションとしての役目を負うものとされる。

「戦国権謀」(昭和28年)では、猿楽役者大蔵藤十郎について、「(大久保)忠隣の改易のもう一つ、心当りの原因は、彼の苗字子であった大久保長安の不始末もあって、家康の心証を損ねていたにもよろう。長安は、もと大蔵藤十郎とって一介の能役者であった」とあり、「この藤十郎に大久保姓を名乗らせたのは家康で」、「しかるに長安に私曲があり、彼の死後、家康はこれを追罰した」とも言われる。原著の二年後、以下に述べる「山師」で、清張は正面から大久保長安、大蔵藤十郎のことを描いていくことになる。

「山師」(昭和30年)について、清張は「私の歴史小説としては最初の気に入ったもの」と評している。家康が天正十八年に京都から四座の猿楽をよんで興行したことや、その際に「役者共はかなり長期に留め置かれ、替る替る夜詰めに罷り上った」ことなど、具体的に猿楽役者の勤仕したさまが書かれている。この末座に座っていた猿楽役者の大蔵藤十郎が家康に近づいていき、「家業の猿楽師を廃めて金起こる奉行にならぬか」と家康が誘うと、藤十郎は「何分にも畏み奉り候」と答える。「顔は一時に血の色がさし、返事には弾んだ息が單っていた」とある。藤十郎は金堀奉行(山師)になることで、猿楽役者といういち芸能者の身分から大きく出世していくという話である。

猿楽興業の奉行が大蔵藤十郎を家康に取り次ぐ場面で、家康は「猿楽役者がのう」と目を天井に向けながら言う。家康は猿楽を楽しんでいるが、一方で猿楽に対する冷ややかな眼差しを持つ権力者として描かれる。藤十郎の生い立ちについても、大蔵太夫という猿楽師の子で武田家に仕えていたこと、猿楽師として活躍していたこと、もともと金春が出身であることなど、史実に深く踏み込みながら描かれている。

「破談変異」(昭和31年)では、主題そのものに能「八嶋」のモチーフが大きく取り込まれていることが注目される。本作品では、冒頭から「江戸城中、二の丸殿にしつらえた舞台では、京より四座の能役者を呼びくだして、舞わせていた。寛永五年の春のことである。曲は家光の好きな「八嶋」であった。家光は正面の座から身体を前にのりだすようにして観ていた」とあり、「山師」に出てきた家康の天正十八年の能の舞台に続くものとして設定されている。「景清追いかけ三保の谷が、着たる甲の鍔(しころ)をつかんで、うしろへ引けば三保の谷も、身をのがれんと前へゆく、互いにえいやと、引くちからに、鉢付けの板より、引きちぎって——」という悪七兵衛景清の鍔引きの段も引用される。「破談変異」の主題は武士の名分であるが、そこで、能の「八嶋」を引用してきたねらいは、たとえば弓流しのエピソードで知られるように決してその名を貶めることはすまいと行動した源義経と、本作品における武士の名分を重ね合わせることにあったと考えられる。

『写楽の謎の「一解決」』(昭和52年)では、謎多き浮世絵師写楽について、阿波侯お抱えの能役者、齊藤十郎兵衛ではないかという説が否定される。先の『小説日本芸譚』「写楽」の中では写楽は能役者として設定されていたが、それを後に自身で否定したことになる。なお、現在の能楽研究の側では「写楽=齊藤十郎兵衛(阿波侯(蜂須賀侯)お抱えの能役者)」説が通説である。

「足袋」(昭和 53 年)は近代の昭和を舞台とし、女性師範のスキャンダルと死をテーマとする作品である。ところどころに、能の謡曲が取り込まれている。主人公津田京子は某流の謡曲の女性師匠で、大師匠の水野孝輔に公私にわたり面倒を見てもらっている。ところが、京子は自分の弟子の商社マンである村井英夫と逢瀬を重ねるようになる。しだいに狂乱して、最終的には左側の白い足袋を村井の家のポストに入れて、右の足袋はつけたまま玉川上水で溺死するという話である。本作品の背景には、昭和期において謡曲や仕舞の稽古の人口が増加したという事情がある。女性師範が必要とされてくる時代において、女性師範固有の危うい立場が浮き彫りにされている。なお、本作は昭和 61 年に岩下志麻氏を主演としてドラマ化されている。ドラマでは、やはり男女の三角関係と女性の恨みを描く能「鉄輪」とを重ねた独自の設定になっており、秀逸な演出であった。

そのほか、歌舞伎・文楽については、現在調査途中である。歌舞伎については、清張は『歌舞伎年表』第 1 巻～第 8 巻や『歌舞伎定式舞台図集』を所蔵しており、歌舞伎の歴史やその舞台の具体的な構造に対する興味が窺える。歌舞伎は『危険な斜面』『球形の荒野』『役者絵』『白梅の香』で取り上げられ、歌舞伎座の観客をめぐる描写、役者の人気ぶり、芝居茶屋の文化など、各時代における歌舞伎の風俗を精緻に再現し、作品中に活写している。

浄瑠璃や文楽(人形浄瑠璃)については、清張は『黙阿弥脚本集』第 1～25 巻、また山口廣一『文楽の鑑賞』を所蔵している。日本古典文学大系『浄瑠璃集』上巻は書齋キャビネットに所在しており、最晩年の清張が親しんでいたことがわかる。この点については、中川氏により、『草の径』所収の短編「夜が怖い」(平成 3 年 2 月『文藝春秋』発表)において、浄瑠璃「恋女房染分手綱」中の「重の井子別れの段」が重要なモチーフになっていることもご教示いただいた。

### 3 今後について

本研究の終了段階では、当初目論んでいた「山師」「足袋」の研究については単なる概観に終始してしまったため、引き続き検討していきたい。また、能楽に加え、歌舞伎、浄瑠璃(人形浄瑠璃)と清張作品の関わりについても調査を続けていきたいと考える。

最後に、本研究をおこなう中で、期せずして清張晩年の活動の一端も明らかになったことに触れておきたい。清張は平成 4 年 4 月 20 日に脳出血で倒れ、東京女子医大病院に入院するが、その約一か月前、3 月 21 日～22 日に佐渡を訪れ、講演活動をおこない、堀記念金井能楽堂において家族(ナヲ夫人、義理の娘さん)と写真撮影をしている。佐渡市立中央図書館には、その折の写真 40 枚が残されているほか、「金井町立金井図書館竣工並ニ生涯学習の町宣言 作家 松本清張先生記念講演録 金井町教育委員会」として、清張の講演「歴史取材の旅」が収められていることがわかり、その全貌を知ることができた。『佐渡流人行』(昭和 32 年 1 月発表、2 月刊行)ほか、同時期に佐渡に流された世阿弥についての描写を含む「世阿弥」が書かれていたことや、

清張自身の「山師」に対する高評価、さらには晩年の佐渡行など、佐渡と清張の関係という新たな研究テーマも浮かび上がる結果となった。このテーマについても、追って論考としてまとめていきたい。

以上、本研究の実施報告とする。報告が大幅に遅れ、記念館研究員の中川里志氏には多大なご負担をおかけすることになった。ここに伏してお詫び申し上げます。そして、清張についての情報を惜しみなくご提供くださった同中川氏、藤井康栄氏、松本清張研究会の皆さまに深く御礼申し上げます。

以上